

『翻訳理論の探求』

アンソニー・ピム著

武田珂代子訳(仮訳)

みすず書房より2010年1月刊行予定

第1章

翻訳理論とは何か

この短い章では、「理論」や「パラダイム」という言葉の意味、また理論の構築と翻訳の実践との関係について説明する。また、本書の構成、翻訳理論を学ぶ理由、さらに、討論をベースとした学習プロセスでの本書の活用法についても述べる。

1.1 「理論づけ」から「理論」へ

翻訳者は常に理論を構築している。翻訳作業中、問題に出くわすと、通常、翻訳者はそれに対する複数の解決法の中からある選択をしなければならない。例えば、英国の保守党(Conservative Party)の別称である‘Tory’という英語を訳さなければならないでしょう。場合によっては、英語の言葉そのもの(「トリー」や「Tory」)を用いて説明や脚注を入れたり、‘Conservative Party’の直訳(「保守党」)を使ったり、目標文化の政治状況の中で対応する政党の名前を用いたり、あるいはこういった厄介な問題を避けるために原語を全く訳さないで抜かすという手もあるだろう。これらの選択肢はテキスト、翻訳の目的、クライアント次第で、すべて正当なものとなりうる。そうした選択肢を編み出し(つまり、可能な訳を**生成**し)、それをもとに選ぶ(つまり、最終的な訳を**選択**する)という過程は、困難で複雑な作業になりうる。しかし、翻訳者はまさにこの作業を常に、それも、瞬時にやっているのである。その際、つまり複数の選択肢からある一つを選ぶという意味決定をするとき、翻訳者は常に、「翻訳とは何なのか」、「翻訳はどのようになされるべきか」という問いに対するさまざまな考えを検討している。つまり、理論づけをしているのである。

理論 ‘theory’ という言葉は、ギリシャ語の ‘thea’ 「光景」と ‘-horan’ 「見る」に由来するという。理論を立てる (to theorize) とは、言わば「光景を見る」ことになる。(劇場 ‘theater’ も同じ由来である。) 翻訳では、理論が、生成と選択のプロセスが起こる「場面」を設定する。従って、通常の翻訳作業の中で生成と選択をくりかえす翻訳者は、常に理論を構築していることになる。

この個人的で内的な理論づけも、翻訳者どうしが自分の作業について話し合いだすと公的なものとなる。時に、他の翻訳者やクライアント、また、クラスメートや教師との対話の中で、翻訳者が自分の考えを口にしながら

理論を構築することもあり、その中で、翻訳に関するごく限られた共通の用語が用いられる場合もある。例えば、本書では、原文を表わす「**起点テキスト** (source text)」や翻訳をあらわす「**目標テキスト** (target text)」という用語を用いる。これを延長させると、「起点言語」、「起点文化」、「目標言語」、「目標文化」という用語も使える。そうすると、「**翻訳する**」という行為は、ある一方からもう一方へとつながるプロセスということになる。

これらの用語の存在は、すでに理論を用いていることを意味するのだろうか。おそらくそうではない。少なくとも、明示的な理論を掲げ、それを弁護するという意味で理論が使われているわけではない。それでも、相互に関係する事物の名前によって**翻訳のモデル**が形成されることは多く、非常に強力な指針的思想がこれによって隠れてしまうことがある。例えば、なぜ、これらの用語は翻訳をただ二つの側面（「起点」と「目標」）の事象にしてしまうのだろうか。各起点から、それ以前のさまざまな起点に遡ることは当然可能だし、各目標は、その先にある行動や行為へつながるものにすぎない。つまり、各テキストには、複数の言語や文化の要素が含まれている可能性があり、その全てにおいて通常、起点と目標以上のものが関わっているのだ。さらに、翻訳 (translation) の ‘trans-’ という部分の横に、「起点」と「目標」の概念をおいてみると、翻訳行為がただ単にある一方からもう一方へと動くだけのもの、という非常に空間的なイメージが生まれる。この空間上の移動性があるために、翻訳者は目標文化に影響を与えるが、起点文化には影響を与えないという示唆がこれらの言葉に含まれている。しかし、これは普遍的な考え方なのか。

例えば、このモデルと、サンスクリット語とヒンディー語で「翻訳」を意味する ‘**anuvad**’ とを比べてみよう。これは基本的に、「繰り返す」または「あとで述べる」を意味するという (Chesterman 2006; Spivak 2007: 274 参照)。上記のモデルとは異なり、この言葉によると、あるテキストと別のテキストの間の主な差異は空間ではなく、時間にあるということになる。つまり、翻訳は、異文化間の何らかの物理的移動というよりは、更新、改定していく継続的なプロセスとして見ることができる。

相互に関連しあう事物の名前によってモデルが形成され、そのモデルが理論となり、翻訳において何が可能で、何をすべきかについての考え方に基づいた「場面」が設定されるのだ。つまり、基本的な用語が理論を要約していることになる。その理論についての意識はほとんどないにしてもだ。

しかし、個人レベルで内行的に行われる理論づけが常に公的な理論になるわけではない。翻訳者の間では、議論になることもなく標準的な言葉が受け入れられることがほとんどだ。言語の使用法、言語的知識、ないしは常識に照らして、あからさまな誤りはすぐに訂正される。例えば、‘Tory’ という言葉を右翼の過激派と考える翻訳者がいたらそれは正されるだろう。その際、交わされる議論は興味深いかもしれないが、翻訳理論は無用だ (政治理論は必要かもしれないが)。翻訳の仕方について異なる意見があり、同意が見られない場合にのみ、私的な理論づけが公的な理論となるのである。例えば、‘Tory’ という言葉についてさまざまな翻訳者が異なる訳し方を考えたとする。一人目は「翻訳は起点文化を説明すべきである」(よって、英語の言葉をそのまま用い

て長い脚注を加える)とし、二人目は「翻訳は目標文化の受容者が理解できるものでなければならない」(よって、「主要な右派政党」と訳す)と考え、三人目は「翻訳は全てを目標文化での位置づけになおすべきだ」(よって、目標文化の保守政党の名前を使う)と考え、そして四人目は起点テキストは政治を主題としていないので、些細でお飾り的な箇所のために時間を浪費する必要はない(よって、この言葉自体を削除する)と考えるかもしれない。

このような類の議論が起こると、翻訳作業中の理論づけが明示的な理論に転換する。そしてさまざまな理論的主張の間で論争が起こる。その結果、ある理論の方向へ傾くこともあるし、当初は対立していた主張も、より大きな理論の中にあっては共存できるようになるかもしれない。しかし、多くの場合、人は自らの定位置を変えず、議論を続けるのである。

1.2 「理論」から「パラダイム」へ

「理論づけ」が「理論」になると、翻訳のさまざまな側面についての名前や説明(他の理論の盲点とされる部分に対する名前も含めて)を打ち出す理論が出てくる。この段階に達すると、**パラダイム**についての議論が正当化されるだろう。ここでのパラダイムとは、さまざまな理論群の根底をなす原理の集合という意味である(Kuhn 1962が概略した一般的な意味)。特に、全体的な思考、関係性、原理において内的な一貫性や共通する出発点をともなう場合、パラダイムは成立する。例えば、ある理論群が「起点」、「目標」、「等価」という言葉を共通して用いるとする。そこには、「等価」が「起点」と「目標」の間の実質的な関係を指す言葉だという合意があり、起点テキストと目標テキストの比較が共通の出発点となっている。こうした等価の理論を用いる人々は、翻訳に関してかみ合った議論を交わせる。翻訳の目的について曖昧ながら同じ言葉を用い、全体的には共通する考えを持っており、さまざまな等価の種類について何らかのコンセンサスに到達することさえ可能だ。つまり、一つのパラダイムの中で理論づけが行われているのだ。

その一方で、時に、翻訳に関する問題について議論しても、いつもたどり着くのは意見の不一致のみという場合がある。そのような事例では、出発点が異なるさまざまな思考が、それぞれ大きく異なるパラダイムの中で作用しているのだろう。例えば、同じ言語内で翻訳と翻訳ではないテキストを比較して記述する考えがある。この研究結果(翻訳に使われる言語と翻訳でないテキストで使われる言語は異なるという結果)は心理言語学者にとっては興味深いものになりうる。しかし、それは、等価のパラダイム内の研究者にとってはほとんど全く重要性を持たない。翻訳で使われる言語は異なるという議論があっても、等価パラダイムの理論家だったら冷静に「異なるはずはない」と主張できる。こうして両者は、お互いの観点を理解することなく、議論は平行線をたどり、パラ

ダイムの衝突が起こる。そして、その結果、緊張関係の継続（解決の糸口が見つからない）、革命（あるパラダイムが一方を覆す）、あるいは、よくあることだが、沈黙（それぞれが別々の道をたどる）が起こるかもしれない。

1.3 本書の構成

本書は個々の理論、理論家、あるいは学派ではなく、パラダイムを軸とした構成になっている。扱うパラダイムは、等価、目的、記述、不確定性、ローカリゼーション、そして、文化翻訳（他に適切な名称が欲しいところだが）である。等価パラダイムはさらに「自然的」と「方向的」に下位分類される。これは、等価の概念の複雑性を浮き彫りにするためだ。というのも、昨今の理論家の中には、等価を、理論と呼ぶには値しない単純すぎる考えだとして切り捨てる傾向が見られるからだ。本書の関連ウェブサイトには補足資料、特に、単なる実証主義として不当に片付けられることもある記述パラダイムの学問的背景についての資料が掲載されている。

パラダイムの順番はほぼ時系列になっており、1960年代あたりから現在に至っている。例外は「不確定性」パラダイムで、これはさまざまな形態で以前から存在した。実際、不確定性と等価の間の根本的な対立が基本的問題となり、それに答える形で他の全てのパラダイムが生まれたのだ。

本書中、パラダイムは順番に説明されるが、それは、新しい理論が古いものに自動的に取って代わったことを意味するわけではない。そうだとしたら、最後の章だけ読めばいいことになる。逆に、本書では、等価の複雑性と存続性（等価理論の多くはローカリゼーション・パラダイムの中で生き続けている）を示す目的で、等価パラダイムに多くのページを割いている。もちろん、理論は、知識の蓄積に伴い、その記述や予測が改善、洗練され、より厳密になることはありうる。これは翻訳の分野でも時々起こる。というのも、新しい理論が以前からの理論の観点を取り入れようとすることがあるからだ。例えば、ドイツ語圏のスコプス理論は、「特別な場合」というシナリオにおいては適切なものとして等価パラダイムを受け入れている。しかし、このような蓄積は不確定性パラダイム（脱構築を含む）への動きの中には全く見られない。不確定性パラダイムは、等価も目的も弁解の余地のない本質主義とみなしているからだ。そうした場合、あるパラダイムが別のパラダイムの中に組み込まれるようなことはなく、大きく異なる別々のパラダイムとして議論できる。このようなパラダイムはまずもって、翻訳とは何か、何になりうるか、翻訳者はいかに行動すべきかという非常に基本的な問いのところから異なっているのである。パラダイムが衝突するとき、その議論で使われている「翻訳」という言葉がかなり異なる現象を指すこともよくある。そうすると、議論は無意味になるかもしれないが、出発点としたパラダイムから抜け出そうと試みると、突破口は開ける。翻訳に対する新しい視点を理解しようとしたときにはじめて、公的な場での生産的な理論構築ができるのである。

その意味では、結局、全ての章を読まねばならないということだろう。

1.4 なぜ翻訳理論を学ぶのか

なぜこれらの理論を学ぶのか。さまざまな理論についての知識がある翻訳者は、何も知らない翻訳者より良い仕事ができると思込む教師が時にいる。しかし、この主張を裏打ちする実証的証拠はないようだ。また、その有効性を疑う正当な理由はある。専門用語で自分の理論を説明できる者だけでなく、全ての翻訳者が理論づけをしているのだ。訓練を受けていない翻訳者は、複雑な理論についての知識が少ないゆえに、より速く効率的に仕事ができるかもしれない。疑問に思うことも比較的少なく、自明のことを深く考えて時間を無駄にすることもないからだ。一方で、確立した解決法がない問題に直面し、かなりの創造性が必要とされるときは、さまざまな理論について何らかの知識があると、それが実際に役立つかもしれない。理論によって生産的な質問が生まれ、時に、有効な回答が示唆されることもある。また、理論は変化を生み出す重要な因子になりうる。特に、理論がさまざまな職業文化に広がるとき、あるいは、理論を用いて固有の思考に異議を唱えるとき、変化が起こりうるのだ。(前述したサンスクリット語の「後で言う」という翻訳思想を考えるとよい。)さらに、公の場で理論が展開されれば、翻訳の複雑性に対する意識や、翻訳者や通訳者の社会的イメージを高めることになりうる。

ここで本書が主張したいのは、**パラダイムの複数性**が持つ実用的な利点である。一つのパラダイムを他のパラダイム全てと対立させて弁護するのではなく、翻訳に対するアプローチには多くの有益なものがあり、状況によってはそれらが役立ったり刺激要因になりうるという意識の推進が本書の主眼となっている。

さまざまな理論があることを意識すれば、いくつかの点で、翻訳という職業を助けることにもつながる。例えば、議論が生じると、理論が翻訳者にとって価値あるツールとなり、自らの主張を裏付けるものとしてだけでなく、他の意見を知るためにも役に立つ。また、理論は、人が考えてもみなかったことに対して、名前を与えてくれるかもしれない。‘Tory’という言葉が翻訳から消えていたことについてクライアントが苦情を述べれば、目標テキスト中の2ページ後で英国の保守党と目標文化におけるある政党を比べることによって、「補償的対応 (compensatory correspondence)」を実行したという説明もできるだろう。クライアントはそれでは納得しないかもしれないが、こういった用語があれば、可能な訳出のいくつかを説明することに役立つ。実際、上述の理論は、クライアントにも翻訳者と同じくらい実利をもたらすかもしれない。用語や概念の数々を知っていれば、それだけ翻訳者もクライアントも翻訳の可能性について模索ができるだろう。

さまざまな理論についていくらか知識を持っていれば、翻訳のプロセスそのものにおいても直接役に立つことがある。本章の冒頭に、単純な翻訳理論を提示した。つまり、問題が同定され、可能な解決法が収集され、そのうち一つが選択される、というものだ。これは本書におけるモデル(関係している物事に対する名前の集まり)であって、超越的な真理ではない。このモデルに照らせば、理論の複数性によって翻訳者が思いつく解決法の範囲が広くなりうる。選択においては、ある解決法を選びその他を棄却するさまざまな根拠を理論は与えてくれるし、

必要であればその解決法を弁護するために理論を使うことも可能だ。理論の中には、より自明な選択肢を批判し、広範な要因を考えさせるものがあり、**生成**の部分において非常に役立つ。この範疇に入るのは、記述、脱構築、文化翻訳のアプローチだろう。一方、可能な選択肢の中で意思決定をする**選択**の段階で必要とされる理論もある。そこでは、倫理や翻訳の基本的な目的を熟考することによって指針が生まれる。残念ながら、この類の理論、つまり、選択の意思決定の根拠を与えるような理論は、いくつかの学派内では魅力のないものになってしまった。だからこそ、本書はあえて複数性にこだわり、不均衡を正そうとしている。

1.5 翻訳理論はどう学ぶべきか

翻訳者は誰もが常に理論づけを行っているので、理論と、理論がすでに一要素となっている実践を分別することは大きな誤りになるだろう。最良の理論活用法は、翻訳における問題のさまざまな解決法について実際に活発な議論を交わすことにある。翻訳に関して、学生の間で意見の不一致が出ることもあろう。その点について討論させ、必要であれば適切な用語や概念を示唆するとよい。そうすれば、学生は、必要だと認識したときのみ、理論と接するようになる。個々の理論やパラダイムについての授業は、こうした実践をベースにして構築することができる。

残念ながら、教育機関は理論と実践を分ける傾向にあり、しばしば「翻訳理論」という別個のコースを要求する。必要であれば、それも可能だ。しかし、理論とそれが意味することは、一連の実践的課題から引き出され、発見過程として構築されるべきである。本書はそれが可能になる仕組みをとっている。各章末近くに、「頻繁な議論」のリストがあるが、そのほとんどは明確な結論が出されておらず、本書が望むほど頻繁に登場する議論でないものも多い。また、章末には、授業中あるいは宿題として取り組めるいくつかの「課題」を提案している。それぞれの課題に対する回答は提供していない。実際、多くの場合、正しい解決法などないからだ。本書の関連ウェブサイトにはディスカッションやその他の課題の提案が掲載されている。もちろん、それぞれの授業にあった調整が常になされるべきだが、さらに重要なことは、こうした課題を学習過程に組み込むことであり、コースの最後に補足的に扱うのではなく、初めの方で実施されるべきだ。

ある意味、本書の課題は、この書記言語という固定した形式に反対しながら機能することにある。これは自主学習者にも当てはまることだが、真の意味での理論の習得は、対話と討論の中から生まれるべきである。